

第一話 人類の知 第一の成熟 「言語の知」から「暗黙の知」へ

それでは、二二世紀、人類の知の在り方は、どのような成熟を遂げていくのか。そのことを、「人類の知 七つの成熟」として、順次、語っていこう。

まず、第一の成熟は、「言語の知」から「暗黙の知」への成熟。

ここで「言語の知」とは、「言葉で表せる知識」のことであり、書物やネットを通じて学ぶことができるものである。これに対して、「暗黙の知」とは、「言葉で表せない智慧」のことであり、体験や人間を通じてしか学ぶことができないものである。

この「暗黙知」(tacit knowing) という概念は、科学哲学者、マイケル・ポランニーが、その著書『暗黙知の次元』において語った概念でもあるが、それは、彼の言葉、「我々は、語ることができるより、多くのことを知ることができる」というメッセージとともに広く知られている。

では、なぜ、これからの時代、「言語の知」から「暗黙の知」への成熟が起こるのか。

それは、これからの高度情報革命の時代には、「言葉で表せる知識」は、ネットや情報技術を通じて、誰でも容易に手に入れることができるようになるからである。

その結果、これまでは、多くの知識を身につけた人間、すなわち「物知り」「博識」「博覧強記」といった言葉で評される人間が、優秀な人間であるとされてきたが、これら情報革命が進展するに伴って、こうした言葉は「死語」になっていき、ただ多くの知識を身につけているだけでは、優秀な人間とは評されなくなってくる。

なぜなら、現在では、何か分からない知識があれば、すぐに携帯電話やパソコンを使って検索サイトにアクセスし、瞬時に手に入れることができるからであり、ポケットの中の

小さな電子辞書には、何十冊もの事典が入っており、簡単に知識を引き出すことができるからである。

そして、こうした情報革命の結果、「言葉で表せる知識」（言語の知）は、その価値を失っていき、相対的に、体験や人間を通じてしか掴めない「言葉で表せない智慧」（暗黙の知）が、価値を持つようになっていく。

では、こうした「言語の知」から「暗黙の知」への成熟が起こる時代、我々は、いかにして、その「暗黙の知」を身につけていけばよいのか。

もとより、「体験」を積み、「人間」から学ぶことは重要な方法であるが、その前に、我々が必ず身につけなければならない、一つの習慣がある。

それは、いま、自分が語っていることが、単に書物で読んだ「知識」なのか、体験を通じて掴んだ「智慧」なのかを、常に省みる習慣である。

なぜなら、ネットやITを使って膨大な「知識」が容易に手に入る時代だからこそ、我々がしばしば陥る、一つの落とし穴があるからである。

「書物やネットで『知識』を学んだだけで、『智慧』を掴んだと思ひ込むこと」

それは、「現代の病」とでも呼ぶべきものであり、我々の誰もが、無意識に罹っている病である。

それゆえ、その病に気がついたとき、そこから、我々の「知の成熟」が始まる。